

令和 8 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
総合型選抜 I 型（第 1 回）

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、思想家で神戸女学院大学名誉教授の^{うちだ たつる}内田 樹 さんが、中高生に向けて「外国語を学ぶことの意義」について述べたものです。内田さんの意見を要約するとともに、それに対するあなたの考えを600字以内で述べなさい。

今の英語教育は、外国語の学び方としては目指している方向が違っているように思います。外国語を学ぶことはとても大事です。人間的成長のためには「不可欠」と言ってもよい。でも、今学校でやっている英語教育は「人間的成長」ということを目標にはしていないように思えます。

外国語の学習には「目標言語」と「目標文化」があります。「目標言語」が英語の場合、目標文化は「英語圏の文化」です。その言語を学ぶと、それを足場にしてその言語圏の文化の深みにアクセスできる。母語の外に出て異文化圏に入り込み、母語とは違うロジック、違う感情を体験すること、それが外国語を学ぶことのもたらす最大の贈り物です。母語には存在しない概念に出会い、母語には存在しない時間意識や空間意識の中に入り込み、母語には存在しない音韻を母語を語っている限り決して使わない器官を用いて発音する……。これはどれも知性的にも感情的にもきわめて生産的な経験です。

例えば、フランス語には複合過去と半過去という二つの過去時制がありますが、このニュアンスの違いは日本語話者にはなかなか理解できません。過去時制が二つあるのは、フランス語話者が時間の流れを「完了」と「未完了」の二つの^{そう}相で理解するという特異な時間意識を持っているからです。

例えば、J'ai oublié la clef.というのは「私は鍵を忘れた」という意味です。これは完了相。でも、似たような状況について、もう一つ言い方があります。J'oubliais la clef. こちらも過去の話なんですけれど、これは「私は鍵を忘れるところだった」という意味。つまり、「鍵を忘れ始めたが、忘れ切らなかった」ので、最終的にちゃんと鍵を持ってでかけたということです。こちらが未完了相。

不思議ですね、そんなところで時制を切り分けるのって。とにかく日本語では、そんな時制の分け方はしません。そして、時間意識が違えば、世界の見え方も違うし、人間の行動の解釈も違うし、極論すれば宇宙観まで変わる。そういうものだと思います。そして、自分たちとはまったく違う枠組みを通じて世界を見ている人たちがいるという事実を知るのは、個人の人的成長だけでなく、人類が共同的に生きてゆくためには必須のことです。

外国語学習は何よりもまずそのような人間的事業として営まれるべきだと僕は思います。でも、現在行われている英語学習は「^{※注}リングフランカ」としての英語、コミュニケーションツールとしての英語の習得が目的化していて、もはや「目標文化」というものがありません。「目標言語」はあるが、「目標文化」がない。

実際に、ある時期から大学の英米文学科に進学する学生の選択理由のほとんどが「英語を

習得して、英語を活かした職業に就きたい」になりました。英米文学を研究したいという理由で学科選択をする学生が全体の数パーセントしかいないということなら、英米文学科にはもう存在理由がありません。英語がうまくなりたいというのが目的なら、英米文学科に進学するよりもネイティブ・スピーカーが教える英語学校に通った方がいい。その方が学費も安いし、無駄な単位を取る必要もない。そういう理由で日本中の大学から今英米文学科が消えつつあります。あと十年もしたらゼロになるかもしれません。

繰り返しますが、コミュニケーションツールとして英語を学ぶことは端的に「よいこと」です。でも、「目標文化」を持たない外国語学習をいくらしても、それは学習者のアイデンティティーをより強固にすることはあっても、母語的なものの見方を揺るがされるということはありません。つまり、外国語を学んでも、自己刷新に導かれないということです。

※注 リンガフランカ … 共通の母語を持たない人々が、共通語として使用する言語のこと。

(内田樹『どうしたらいいかわからない時代に僕が中高生に言いたいこと』による・一部省略がある)

令和 8 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
総合型選抜 I 型（第 2 回）

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、メディエーターズ財団の代表で、国連や世界中の企業で講演やワークショップを行うマーク・ガーゾンさんが、自分をグローバル化するために必要な考え方について述べたものです。ガーゾンさんの意見を要約するとともに、それに対するあなたの考えを合わせて600字以内で述べなさい。

「世界」とは、リアルな領域だ。私たちの「世界観」は、その領域を描く地図だ。世界観を持つということは合理的なだけでなく、不可避なことだ。この世界があまりに複雑で広大なため、人間の思考回路では完全に理解することができない。そこで、私たちは脳が対応できるように無意識に世界観を作り出し、複雑さを軽減するのだ。「イスラム教徒」「キリスト教徒」「ユダヤ教徒」といった宗教的カテゴリー、または「ロシア人」「イラク人」「日本人」といった国家的カテゴリーを用いると、世界を実際よりも単純にとらえがちだ。私たちは彼らがどのような人々か、何を信じているか、どこに住んでいるかを「^{プレジキッ}予断」し、その「^{ブレイク}偏見」が現実をゆがめてしまう。教室の壁によくかかっていた昔のメルカトル地図が地球の表面をゆがめて表示していたように、文化的に形成された世界観はしばしば、現実をゆがめてしまう。世界を眺めていると思っていたら大間違いだ。それはただ地図にすぎない。

残念ながら、現代社会における「学習」のほとんどは、それが教えられている地域の文化が作りあげた公式にあわせたものになっている。教育の重点を他国よりも自国の文化的歴史や宗教的伝統、政治的または経済的思想に置くのは当然だが、こうした部分的にすぎない教育がすべてだと錯覚していると、問題が生じることになる。なぜなら、決してすべてを学んだことにはならないからだ。自分たちに関係する部分について学ぶというのは、子どもの教育の入口としてはいいだろう。しかしグローバル人材としての教育は、それだけにとどまてはいけない。それだけでは、私たちは一つの種族として問題を抱えることになる。自分にかかわる以外の部分について体系的に学ぶことができなかった人々ばかりでは、地球全体を統括していくことはできないだろう。

こうした偏った世界観は、私たちの頭脳が行っている悪魔との取引を象徴している。知らず知らずのうちに、私たちの頭は世界を、扱いやすい規模にまで縮小してしまう。世界を自分の世界観に合わせることで、より簡単に「説明」することができるようになる。極端に言えば、私たちが「正しくて」彼らが「間違っている」、または私たちが「善」で彼らが「悪」であるという単純化された構図を作りあげることができる。自分の部族や国、あるいは「私たち／彼ら」を区別する境界線を描いてしまえば、世界を全体的に理解する必要がなくなる。自分の世界観という箱の中で、私たちは「その他大勢」を要約して固定観念にしてしまうのだ。

固定観念は、この上もなく複雑なものを単純化してくれるという意味で、便利ではある。人々の実際の姿を学ぼうとするよりも、勝手に決めつけるほうがずっと簡単だからだ。この

ため人類のほとんどは、他の文化に対する単純化された固定観念を含む お仕着せの
世界観 を教えられて育つ。教えられることの一部は真実だが、中には真実でないことも
まじっている。つまり、自分をグローバル化するためには、両者の違いを見分けられるよう
になる必要があるのだ。

(マーク・ガーゾン『世界で生きる力 自分を本当にグローバル化する4つのステップ』に
よる・一部省略がある)

令和 8 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
総合型選抜Ⅰ型（第3回）

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、国連職員として働いている田島麻衣子さんが、自分のアイデンティティーを持つことの重要性について述べたものです。田島さんの意見を300字以内で要約しなさい。また、それに対するあなたの意見を、要約と合わせて600字以内で述べなさい。

どんなに長くある土地に暮らし、その場所の生活習慣になじんだとしても、私はその土地の人々からは、あくまで日本人として見られます。この動かしがたい事実気付いたとき、一刻も早く異国に溶け込もうと必死に努力していた私は安堵しました。他国の言葉を学び、さまざまな国の文化を学ぶ中であっても、私は日本人であり続けるべきなのだと思うと、自分の中に強い気持ちがわいてきました。

私の周りを見渡してみれば、世界を舞台に長い間、素晴らしい仕事を成し遂げている人は、自分のアイデンティティーをしっかりと維持しているように思います。五か国語を操り、各国の大使を務めた経験がある知人は、今でも母国の民族衣装を大切に持っています。アメリカでビジネスを成功させたフィランソロフィスト（慈善家）は、自分の出身地であるアルメニアに全財産を投入し、アルメニアにはまだ数少ない、現代的な設備を備えた学校を建設しています。

アイデンティティーへの自覚は、異質の集団に入ると、非常に大きくなります。そして、アイデンティティーが揺らぐと、個性あふれる集団の中で流されてしまいます。逆にここがぶれないと、どのような集団の中でも、しっかりと立つことができます。このアイデンティティーをきちんと持つために必要なのが、自国を取り巻く状況に対する「多角的な理解」と「静かなプライド」だと思います。

海外にいと、日本ではまず遭遇しない場面で、自国への理解度を厳しく試されることがあります。例えば、インフォーマルな食卓で和やかに談笑していたときに、突然、日本の捕鯨制度への意見を聞かれたりします。また、友人になった中国人と、カフェでおしゃべりしていたところ、急に、第二次世界大戦中の南京事件に関する個人的な見解を問われたこともありました。海外では、日本人が自分ただ一人という状態で、このようなかなり際どい質問やコメントが飛んできます。それも昼食や夕食を共にするといった、日常生活の一場面での話です

日本国内で、日本人に囲まれながら、日本語で自分の思うところを述べるのと、海外で、外国人に囲まれながら、その場にいる唯一の日本人として英語で自分の考えを述べるのでは、雰囲気だけをとっても雲泥の差があるでしょう。おそらく、このような問題には、唯一絶対の正解というもの存在しないと思います。大切なのは、目の前の異なる立場にある人々がどのような見方をするのか、また相手の文化的バックグラウンドがどのようなものかに配慮した上で、自分の意見の表現方法を決めることではないでしょうか。

仮に、捕鯨に関して強い拒否感を持つ人々が目の前にいるとしましょう。そして、自分は

捕鯨賛成の立場を取る人間だとします。自分の信念を曲げずに、なおかつ相手との感情的なしこりを残さずに、この場を切り抜きたいのであれば、「このような立場とこのような立場がある」と事実関係の分析にとどめ、意見は差し控えるのが賢明だと思います。

また、「静かなプライド」も、広い世界で働く場合に、その人に安定をもたらしてくれると思います。「私の国はこんなにすごいんだよ！」と人に言われる機会も少なくありませんが、それを笑顔で受け入れられるのも、私自身が日本人であることに誇りを持っているからだと思います。

日本に住んでいたときはあまり意識していませんでしたが、最近、日本は個性豊かな国だと確信するようになりました。四季に応じて移ろう景色や、繊細で豊かな食文化は、世界の全ての国で見られるものではありません。また、いろいろな問題が山積みではあるものの、日本は安全で、社会のシステムがかなり高いクオリティーで機能しています。

ただし、自分の国に対する誇りやプライドは、前面に出過ぎてしまうと鼻に付くものですので、内に秘めておくぐらいがちょうど良いと思います。どこの出身であろうと、自分のルーツを大切にしている人は強い。世界で生き生きと働く人々を見ていて、思うことの一つです。

(田島麻衣子『世界で働く人になる！』による・一部省略がある)